

水尾順一教授・吉住知文教授を送る

経済経営学部長 小澤 伸 光

水尾順一教授・吉住知文教授が本年3月末をもって退任される。

駿河台大学経済学部、経済経営学部の教員として、多年にわたり、研究、教育、社会貢献、校務にご尽力・ご貢献を賜ったことに、先ずは、心よりお礼の言葉を申し上げねばならない。

水尾先生は、1970年3月に神戸商科大学商経学部卒業後、株式会社資生堂に入社され、本社営業力開発部、コーポレートデザイン室、ビューティーサイエンス研究所、法務部等を経て、1999年4月に本学経済学部助教授に就任された。翌2000年4月に教授昇任その後学部名称の変更に伴い、経済経営学部教授としてここに退任を迎えたことになる。

本学部・大学院では、マーケティング領域の講義・演習を担当された。豊富な実務経験と旺盛な研究活動を基盤とした、企業の現場との関連性の高い内容は、数多くの受講者に学問への関心と同時に、学問の実践的な意義を伝えるものであった。とりわけ、「企業倫理」を扱った講義は、時代の要請に叶うものであり、さらに、「ビジネスケーススタディ」では多くの企業人の出講を頂き、大学と社会とのつながりを受講者に伝えるところ大であった。

水尾先生は、単著11冊・編著14冊・共著43冊を公刊され、また多数の和文・英文の論文を執筆されている。日本経営診断学会、日本経営品質学会、日本経営倫理学会、日本マネジメント学会、ビジネスクリエーター研究学会で理事等の役職を担われたのも、これら旺盛な研究活動のしからしむるところである。

さらに、本学経済研究所所長、企画広報委員会委員長を歴任されるとともに、学外では経済産業省「グローバル企業と経済協力に関する研究会」座長、同省「BOP ビジネス政策研究会」委員兼ワーキンググループ座長を務められた。

本学教授として果たされた社会貢献の密度は極めて濃いものであった。

水尾先生はその飄々としたお人柄を言葉の端々に示された。オープンキャンパス模擬講義では、ポッキーの実物を持参され、ジョークを交えた内容は「経営学」への親しみを受講した高校生に伝えるものであった。しかし、「企業倫理」を講じる研究者の視点から会議でなされる指摘には、瞠目に値した。

吉住先生は、1971年3月東京大学教育学部卒業後、株式会社電通勤務を経て、1976年4月埼玉県立浦和西高等学校教諭に就任された。高校教員として教育活動に邁進しつつ、埼玉大学大学院経済学研究科修士課程修了し、東京大学大学院経済学研究科博士課程単位取得後退学するなど、研究活動を継続されていた。2003年4月に駿河台大学経済学部助教授に就任し、2006年教授昇任、その後学部改変にともない、経済経営学部教授として現在に至っている。

先生は、イギリス支配下のインドにおける森林行政をテーマとした論考を多数公刊されるとともに、地理教育の教材の執筆にも注力されていた。

駿河台大学就任後は、高校教育の経験を活かされ、教職課程の中核を担い、教職に関する科目をご担当なさると同時に、研究テーマと関連する「経済地理」の講義を開かれていた。

教職課程でのご活躍は講義にとどまらず、教職課程委員会の主任を延べ8年間務められた。本学部就任以来、教職課程全体の運営に中核として貢献されたのである。

また、埼玉県立大宮中央高等学校懇話会(評価委員会)委員、埼玉県立朝霞西高等学校評議員、埼玉県立川口高等学校評議員を歴任され、大学と高校とを結ぶ役割を果たされてきた。駿河台大学の社会貢献・地域貢献の一翼を担われてきたのである。

吉住先生は、多年にわたる高校教育の経験から得られた知見を、教職課程教育に活かされるのみならず、本学部における高校から大学への円滑な移行を保障する仕組みづくりに寄与されてきた。学部教授会、FD会議における適切な発言によって、私たちが気づかされたことは少なくないのである。

退任される両先生に共通するのは、企業の現場、高校教育の現場でのご経験が豊富であり、大学教員がともすれば気づかない「現場感覚」をお伝えいただいたことである。

この現場感覚は、教育の場でも大いに活用頂いた。他者視点をえる機会が豊

富にあることは、駿河台大学経済経営学部の特徴のひとつを形作ってきたのである。

水尾教授・吉住教授のご貢献を記しながら、改めて、両先生の存在の大きさに気づかされてきた。両先生の今後のますますのご健勝とご活躍を衷心より祈念するばかりである。